（やみ）市から始まって徐々に活発な動きが全体に波動を起こし大分市の原動力になり生活の基盤が築きあげられるまでには五年の月日は要さなかった。

この後、日本全体にも順調に経済が延びてゆき失業者も減少してゆくが完全な復興にも未だ未だ時間が懸った。

アメリカの援助もあって食生活も少しづつ改善し、二十一年から学校給食が始まり私達はその第一号の恩恵を被った。

私の家庭にはソ連で抑留生活を長く強いられ辛苦をこの上ない味わった兄も無事帰還し、姉夫婦も憔悴（しょうすい）し切った姿ではあったが満洲から引き揚げて来た。

それまでは毎日毎日京都の舞鶴に着く引き揚げ船の名簿の中に家族の名前を見つけようとラジオの発表に父母も私も噛じりついていた事だった。

私の家庭は幸運であったが、戦地で戦死して生還しなかった家庭や未帰還のため何年も待っている家族の方も多くあった。

またあの残酷な広島、長崎の原爆で一瞬の内に多くの人々が猛火の中で焼けただれ、もがき苦しんで炭化して死んでいったことを思うと、私達はこうして生きて平和を願える喜こびにどれだけ感謝してもしきれぬことである。

現在、世界のあちこちで大小の戦火があがって罪もない多くの人々が犠牲になっているのをテレビが放映し私達はそれを目の前にしている。

湾岸戦争のあの背筋に氷を感じる様な残酷で悲惨な映像も同じ人間である私達が目を伏せることなく茶の間で見ていたのである。

戦争は終っても永遠に苦悩が続き、永遠にその爪跡が地球上に残り、人々の恨みは地球の果てにまで届くほど大きなものである。

戦争の罪の重さを私達は子々孫々に語り継ぎ伝え継ぎ、遠き過去の事と風化してはならず、歴史の中に埋没させては断じてならぬ。

このようにして戦争を体験して来た私達はこれを布石としてやがて来る二十一世紀に向って世界平和を叫び続けることが私達一人一人の戦争責任ではなかろうか。